小さく、
小さく、
小さく。

「私はだれ？」

「私が、ここにいる意味はなに？」

「私を私から遠ざけたものはなに？」

「本当の私は？」

自分を知る勇気が和美に沸き起こっていた。

「自分であるがままが、それが、一番私の能力が発揮される時」

今までは、他の誰かになろうとして苦しんでいた自分がいること。
勝手に、こうあるべきとか、こうでなくてはならないと思い込んで、制約していた自分がいたこと。
自分にブレーキをかけていたのは、他の誰かや何かではなくて、自分だったこと。

自分でつくってきたのだから、自分で変えられる。
和美は気づきだしていた。

幸せな成功の第１歩が、
客観的な自覚からだということを。

変動

和美は星野コーチが言っていたことを思い出していた。

「何かに気づいたら、後は行動することです。
自分の行動が変わらないかぎり、周りに変化は起きません。
大きく変える必要はありません。

小さな、止める。
小さな、変える。
小さな、始める。
を今から行動すると決断することです。

あとは、その繰り返される行動が、やがて習慣になり、
その習慣が人格ととなり、人格を作り上げる道そのものが人生になります。」

「自分の人生の物語に、もし誰も共演者がいなかったらつまんないでしょ。」

「人は、存在するだけで、誰かの物語に登場して、その物語に色を添えます。良くも悪くも影響します。」

「生まれてから今まで、少しでも触れた人が沢山いたから、私たちは何かを手にしてきたはずです。」

「経験、知識、感情（喜怒哀楽）、資源、思い出、もちろん物質的な物も含めて」

「私たちは、存在していることそのものに価値がある。」

「僕は、そう信じています。」

星野の言葉に、和美は共鳴するように、自分に新たな問いを投げかけていた。

「真也の存在価値は？」
「由紀の存在価値は？」
「誠の存在価値は？」
「河合さん、山口君、川本さんや他のプロジェクトメンバーの存在価値？」
「私の存在価値？」

自問をするようになって、和美は少しずつ態度や行動を変えていった。
それと同時に、今まで見ているようで見えてなかった何かを発見するようになった。
今までの日常が、少しずつ違った景色を見せていた。

日常は変わらなかった。
和実の見方が変わったのだ。
和美に、大きくシフトする準備が整いつつあった。

翌朝、星野が教えてくれてことをやってみた。
相手の存在を認める言葉の代表、それは「挨拶」
和美は、当たり前すぎて、なんで挨拶するかの目的を忘れていた。

そして、「名前」。
「名前」は世界でたった一つのあなただけというメッセージ。

朝、いつものように2人のお弁当を作っていたところに誠が起きてきた。

仕事の関係で、夜遅くなることがある和美にとって、子どものお弁当を作ることだけは、母としてのこだわりだった。

「誠、おはよう」
目が合った。
「あっ！うん・・おはよう・・・ございます」
お互いちょっと恥ずかしい気持ちを味わった。

名前をつけて声をかけるだけで、いつもとはまったく違った響きと顔になっていることに気づいた。
そこには、お互いがお互いの存在を認めた短い影響があった。
心のひだにさわやかな風を感じるようだった。
それ以外はいつもと変わらぬ朝の光景なのに、でも、窓から差し込む光がどこか違う。あわただしささえ心地よい感じがする。
誠が、サッカーの朝錬で早めに家を出るとき、和美は、「いってらっしゃい」と一緒に、誠に手を差し出し握手をした。
その手は、和美が想像していたよりはるかに大きかった。
誠の手を握ったのが、ずいぶん昔が最後だったのに驚いた。
和美の周りで、何かが澄んでいく気がした。ちょっとずつ、ちょっとずつ。

「河合さん、おはよう」
「山口君、今日も元気ね。あっ！ネクタイおニューね」
「川本さん、おはよう。そうそう、この前資料を整理してくれてありがとう。助かったわよ。」
和美は、メンバーのひとり、ひとりに声をかけた。
目を見て、肩に触れて、新調のネクタイを指差さして、一人一人に一つずつ小さな影響を届けた。

新しい一日が今日も始まった。今までと違う一日が。
気づかないほどの空気の違いを、和美はまだ気づいていなかった。
確かなのは和美が何かを変えたこと。
それだけだった。

和美は研修で得たことを、家でも職場でも無理せずできる事から試していた。

動きだすまでには、理解が必要な和美だが、納得すると動きは早い。
それが和美のいいところでもある。

人は、【わかる】と【動く】が、セットになりだすと加速しだす。
曖昧なことがどんどん明確になるだけで動き出せる。

和美は研修のワークでやったことを思い出していた。
人の行動に大きく影響している物の見方・考え方はこれまでの成長してきた過程が大きく影響している。
部下であれ、誰であれ人はこれまで奇跡の物語を演じて今日まで来た。その奇跡の物語を紐解きながらたどることは、自分を見つめる上で大きなヒントになった。
研修では、お互いの物語をペアになって聞いていったのだ。

子どもの頃のこと。
育った環境。
夢中になっていたこと。
口ずさんだ歌
待ち遠しかったこと。
エピソード。
悔しかったこと。
親の口癖。

自分の物語を話したのは、いつのことだっただろうか？
和美は、それがたどれないほど昔だったことを知った。

仕事で一緒のチームを組んでいるみんなの物語。

和美は、研修で話した自分の生い立ちを思い出していた。

物語

「和美、健一をつれて駄菓子やでもいっておいで。夕飯はコロッケを買っておいたから二人で先に食べてな。今日は忙しくなりそうだから、健一をお風呂に入れておいてね。」

「は～～い！ほら、健ちゃん、行こう」

和美は、学校の図書館から借りてきた若草物語を閉じて、重たいランドセルに入れて店を出た。
店の前の道路をボンネットバスが通り過ぎていった。バスの真ん中で銀色のバーに体を預けて黒いガマ口のバックを提げたバスのお姉さんがとってもうらやましかった。
いつか駄菓子屋のガラス戸にぶら下げてある車掌さんセットを買ってもらえるのが夢だった。
和美の家は、東京の下町で雑貨屋をしていた。九州から出てきた両親が２人で築いた小さな城だった。
和美は学校から帰ると、店によって保育園に健一を迎えに行った。
それから両親が店を終えてかえってくるまで、弟の面倒を見るのが役目だった。

和美は、本を読むのが好きだった。
それも外国の少女小説に自分を重ねて、その時代を旅するように読んでいる時は、無我夢中になっていた。
本を読んでいる時だけは、おねえちゃんではなく、自分自身だった。
時間が過ぎていくことをいつも忘れていた。

両親が自分たちのために一生懸命働いていることはわかっていた。しかし、心の中では「なんで私ばかり・・」とつぶやいていた。
それでも、両親から言われたことには、いつも従った。
和美がなかなかＮＯと言えないのは、このころから身に付けてきた力かもしれない。
そんな和美を両親は「この子は、ほんと、弟の面倒を見るいい子なんですよ」とお客さんに自慢していた。
和美は、誉められれば誉められるほど、嫌と言えない自分が嫌いになっていった。
ＮＯと言わない私はいい子で、ＮＯと言う私は悪い子という考え方が少しずつ、和美の考え方になっていった。

和美が中学３年になったある日のこと、高校進学の説明会があった。

共働きの両親は店を離れられないと出席しなかった。
これまでも和美は、一人で何でもやってきたし、一人でやるほうが気が楽だということも身に付けていた。
人に頼れない性格も自然と纏ってきていた。

高校は、あまり将来のことなど考えないで、一番近い公立の高校を第一志望にした。
私立より学費がずっと安上がりなのを和美は知っていた。
子どもなりの気遣いだった。

和美は、英語が好きだった。違う言葉から違う世界を見たかった。
いつかは、英語を話す仕事に着きたいと漠然と思うようになっていた。
ただ、純粋に好きだということで十分な15歳だった。
根拠のない憧れが許される時代だった。

巷では、ピンクレディーが全盛期だった。
和美の年代の女の子は、今でもカラオケで、振り付きで歌える。
それだけ、この時期は時代に大きく影響を受けていた。
間もなく、山口百恵が引退した。

時代は、昭和30年代から40年代、50年代と大きな流れに翻弄されていた。
昭和が終わる前に両親は店をたたんだ。
東京の下町から人影と人情が消えてだいぶ時間が過ぎていた。
小さな城は大きなお金に変わった。
和美の住んでいた木造の町並みがビルの森に変わった。

東京の西に移りすんで間もなく、父親が死んだ。
仕事がやりがいだった父は、他のやりがいを見つける間もなく老いていった。
会社勤めじゃない父親の葬儀は簡単なものだった。
土地を離れた父を見送るのは、親戚と家族だけだった。
父親は、和美の花嫁姿を見ることはなかった。

残された母は、一人慣れない土地で一生懸命生きていた。
和美は、この時はまだ父と母に何か許せない気持ちを持っていた。
それでも、父親がよく連れて行ってくれた飲み屋のおでんの味は忘れられなかった。

真也と結婚して最初のアパートが手狭になったのは、由紀が生まれて1年を過ぎたころだった。
真也から母との同居話が持ち上がってからは、アッという間に母との同居が始まった。

同じ九州出身の真也と母は、割と馬があった。
真也は九州の果実農家の三男だった。長男が家をついで真也は東京へ夢を抱いて出てきた。しかし、夢はいくつかの恋愛と麻雀とバイトに消えた。
就職してからも、2回夢を求める理由で仕事を代わった。
誠が生まれるころには、今のところで結果を出すことに夢を押し付けようとしていた。

一人から家族になることで、働くことの意味が変わる。
そんな時代だった。

ただ、家族を作るのに一生懸命だった。
母親との同居が１０年目を迎えようとした時、和美の母親は年老いた姉と暮らすと言って、九州に帰っていった。
一つの子ども部屋を由紀と誠で使うには、２人は大きくなりすぎていた。
みんな、大切な家族の為に、何かを我慢する時代だった。

時代は人を育ててきた。
和美が生きた時代。
真也や生きた時代。
母親や父親が生きた時代。
由紀や誠が生きている時代。

チームのみんなが生きてきた時代。

和美は、自分には、様々な時代と、その人が生きた物語が交差しているのを知った。

しかし、まだ物語があることを知っただけで、早く周りの人の物語を読んでみたかった。それだけ、知らないままに過ごしてきたこれまでがあった。

受容

「誠が生まれたおかげで、パパとママには沢山思い出が増えたの、だからとっても楽しかったのよ。」
「パパなんか、普段は熱があっても仕事は休まない人なのに、陣痛が始まったら、すぐに会社に休むって電話したのよ。」
日曜日、誠と2人で買い物にでた帰りに、ちょっと贅沢して、パフェを食べによった時に和美が言った言葉だった。

「ほんと、ねえ。僕が生まれてよかった？」

「もちろんよ。楽しい事ばかりじゃないけど、どれも大切な思い出よ。誠、これからもパパとママに誠と一緒にいることで沢山の思い出を頂戴ね。頼んだからね。でも、ハプニングはほどほどにしてね。」
「ねえ、ママ。ほんとはね、僕、プロのサッカーの選手になりたいんだ。なれるかな？」
「もちろん。ママは誠を信じてる。誠はどう思うの？」
「ママが信じてくれるなら、きっとなれるね」
「そしたら、ママとパパをワールドカップに連れて行ってあげるね」
「そしたら、思い出増えるよね」
「ほんと！ママ楽しみだな。ママも誠に負けないように頑張ろう。なんか誠に勇気をもらっちゃたな。」
「ママ、最近すごっく疲れた顔しているよ。よくため息ついてるし、あんまり無理しちゃダメだよ。」

梅雨の合間に見せた夏色の空を見上げて、二人は手をつないで帰った。
和美と誠は、あの日以来朝の「行ってらっしゃい」の代わりに握手を続けていた。頼もしい新しい恋人のように。
誠との関係とは裏腹に、和美は、由紀のことが触ると壊れそうで、手を出すのをためらっていた。
由紀と和美、親子だから似ているといえばそれまでだが、和美は自分の中にいるもう一人の自分が由紀と重なるのを知っていた。
重なるからこそ、自分の中で嫌いなところを由紀に重ねて、目に付いて仕方がなかった。
由紀に対する小言は、まるで自分に言い聞かせているようだった。

由紀と向き合うことが、自分と向き合うことになる。
あとで和美はそれを知ることになる。

しかし、和美はそれを受け入れる覚悟をしだしていた。
ただ、きっかけが欲しかった。

「あなた、今日のイベントどうだった？」
和美は、真也の食事が終わるころを見計らって、お茶と一緒に声をかけた。
明らかに疲れきっている真也だった。

「ダメだ！」搾り出すように真也が答えた。

「そうなんだ、あなた勝負だって言ったものね。」

「思った以上にお客さんが集まらない。確かに難しい時だとはわかるんだが・・・」

「そうなんだー・・・・」和美は次の真也の言葉を静かに待った。
心の中ではあなたは頑張っているわよ。絶対大丈夫とつぶやきながら。

「今までのやり方じゃ上手く行かないのはわかっているのに、でも、どうしたらいいかわからないんだよ。」
「そうなんだー・・・・」和美は真也の次のことばを待った。
「俺が何かを変えなくちゃいけないよな・・・」
「そうなんだー・・・。それで・・・」真也にはちゃんと答えがあうように、和美は素直に感じていた。
「そうだな、次のイベントは、もっと若いやつに任せるか。俺がやりすぎるのかな？」
「和美はどう思う？」
「そうね、私にはあなたの仕事はわからないけど、絶対にあなたの情熱は、みんなに伝わっていると思うよ。」
「だって、この私が選んだ旦那さんだもん」
「それで、あなたはどうしたいの？」
「内の課の連中がもっと楽しく、明るく仕事をして、一緒に何かをやり遂げたいんだ。」
「あなたならきっと出来るわよ。」
「これまでだって、けっこう大変な時も乗り越えてきたじゃない」
「なんか照れるな、お前どうしたんだ。」
そこには、さっきの疲れきった真也とは別な真也がいた。
ちょっとだけ、希望の光がさしていたように和美には見えていた。
「ばらしちゃおうかな、あのね。会社で研修があってね・・・・」
和美は会社で受けたコーチングの事や、星野のことを真也に話していた。
勇気と夢について話したこと。
自分のチームに認める声をかけ始めたこと。